

ト又類ヒナク、尋常ノ櫻ニハ似ルベクモアラズ、傳ヘイヘラク、昔シ順徳上皇極テ櫻ヲ愛サセタマヒ、遷幸ノソチ人シテ都ヨリ數種ノ花ヲメサレ、泉ノ御所ノ南ニゾ栽サセラレケル、其中ニ此一種ノミ水土ニ合ザリケレバ、重テ御ミヅカラ所ヲ撰バセタマヒ、爰ニウツシテ栽置セタマヒケルトナリ、中ゴロマデハ世ニ移ル老木ニテヤアリケム、越後ノ國ノ古キ童謠ニモ、佐渡ノ三岬ノ御所櫻、枝ハ越後ニトウタヒヌ、何レノ頃カ枯ルコトニタビニ及ビテ、今ハ其蘖生ナリトイラ、海潮寺縁起トイフ物ニハ、怪シキコトノミナ記シテ、實説ニ纒ニ其末ニ出セリ、今コトニ記ス所ハ、加茂郡井内村ノ神職本間某トイフモノ、家ノ舊記ニシタガラ、

〔閑窓瑣談三〕母櫻。

紀州野中村に秀衡の母櫻といふ名木あり、奥州の旅客は何れも此櫻を尋來るといふ、其由來は委しく知れず、高さ八九間の木なり、

〔西遊記三〕十六日櫻。

伊豫國松山の城下の北に、山越といふ所あり、此處に十六日櫻とて、毎年正月十六日には、此さくら満開して見事なり、松山より花見とて貴賤群集す、寒氣面をそぎ、餘雪梢を封する頃に、此さくらのみ色香めでたく咲出れば、遠近の人ともにもてはやして、殊に其名高し、過し年先太守より和歌の御師範京都の冷泉家へ、此花を贈り給ひし事あり、其時冷泉殿より御返事の御和歌あり、十六日ざくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく、驚くばかりの初花櫻の花になん、賞翫の辭、

さるのこる、雪かと思れば、年々のむ月半に、さくといふ、初花櫻はつ春の柳の木のめ、それもまだ、色別そむる、ころにはや、若葉催し、ほころぶを、散さぬ風の、たよりもて、心有人の、見せばやと、折こせはこそ、けふ見そめつれ、

## 返歌